

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第19号

目次

大学文書館十周年にあたって

佐々木 丞平 …………… 2

数字で見る大学文書館の10年

西山 伸 …………… 3

日誌 …………… 6

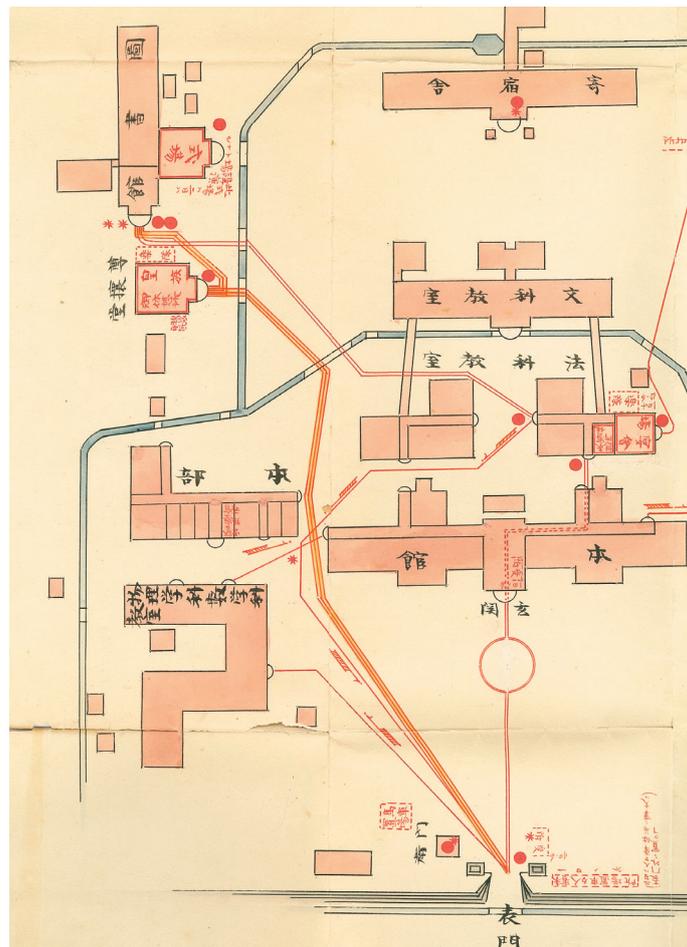
大学文書館の動き：

法人文書の廃棄と移管をおこないました
…………… 7

人の動き …………… 7

京大創立十周年と木下広次の断案

清水 善仁 …………… 8



「京都帝国大学図」(「記念祝式関係書類 自明治三十一年至大正三年」)

京都帝国大学10周年記念祝式のために作成された学内図。祝式は1907(明治40)年4月1日に図書館で開かれた(本誌8頁参照)。表門から左上に向かって赤の三重線は「皇族御道筋」であり、賀陽宮邦憲王が列席した。同線は表門から「皇族御休憩所」(尊攘堂)をへて図書館まで引かれている。表門から北進する赤の二重線は「来賓通路」を指し、本館と「来賓休憩所」(法科教室)をへて図書館まで引かれている。赤の単線は「一般観覧人順路」であった。

大学文書館十周年にあたって

京都国立博物館長 佐々木 丞平

京都大学大学文書館が設置されて、この11月1日でちょうど10年ということで、当時設立に関わった者としては若干の感慨を覚えます。

2000（平成12）年4月、私は附属図書館長を拝命するとともに、当時完成に向けて大詰め
の段階にあった百年史編集委員長に就任しました。写真集を含めると全8巻に及ぶ『京都大学
百年史』の編集にあたっては、貴重な資料が多数収集されており、編集終了後にそれらの資料
をどのように生かしていくかが大きな課題で、当時の総長長尾真先生が附属図書館長でいらし
た頃から、文書館設立を強く提言されていました。

その一方では、「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」（情報公開法）の施行（2001
年4月）も迫っていて、大学の文書管理・公開体制の整備も急がれていた時機でもありました。

そうしたなか、2000年4月4日の部局長会議の議論を経て「京都大学の歴史に関する史料
の収集・保存・公開等のための組織についてのワーキンググループ」が設置され、私
がその取りまとめ役となって、同年10月に「大学文書館」設置の必要性を報告し、長尾
総長はじめ大学当局の深いご理解のもと、翌11月に京都大学大学文書館が設置された
のでした。と同時に、私は初代館長を命じられ、種々の環境整備に微力を尽くすこと
になりました。

設置1年後の2001年11月に発行された本誌『京都大学大学文書館だより』第1号を
繙いてみましたら、拙稿「大学文書館の設置」のなかに次のような文があるのを見つ
けました。

収集した史料を基本に、自らの大学の歴史や大学のあり方についての研究・教育のセン
ターとして学内外に様々なメッセージを発信することによって、大学文書館は継続
的・恒常的な自己点検の場となると同時に、史料を公開することによって第三者
からの評価にも応じられる開かれた場にもなることができると思われま

す。大学文書館に期待されるこうした役割は、現在でも全く変わっていません。それ
どころか、「公文書等の管理に関する法律」（公文書管理法）の制定に見られるよう
に、国立大学法人を含む公的機関において、自らの軌跡を示す資料を適切に管理
し、一般に公開していくことの重要性がますます高まっていると言えま

す。大学も、そして社会全体も更なる変革が求められている時だからこそ、自
らの歩みを検証する大学文書館の存在は不可欠なものなのではないでしょうか。

大学文書館の今後益々の発展を期待しております。

数字で見る大学文書館の10年

京都大学大学文書館准教授 西山 伸

京都大学大学文書館は、2000年11月1日に設置されたので、今年でちょうど10年になる。本稿は、この間の当館の活動を表すいくつかの数値データを提示し、これまでの歩みを整理するとともに、今後の課題を考える一つの手がかりとなることを目的とする。

1 非現用法人文書移管冊数

「京都大学における法人文書の管理に関する規程」（当館設置当時は「法人文書」ではなく「行政文書」）の第9条「保存期間（延長された場合にあっては、延長後の保存期間とする）が満了した法人文書は、京都大学大学文書館へ移管するものとする」との規定に従って、2001年度から当館は移管を受け始めた。まず2001年度は事務本部から、翌年度からは部局を含めて全学より移管を受け、「京都大学大学文書館規程」に定めるところの分館保存分以外の法人文書はすべて当館書庫に移されるようになり、現在に至っている。表1は、当館書庫に移された非現用法人文書の冊数を示している。最初の2年を除き、大きく見れば当館への移管は増加傾向にある。本来、1年間に作成・収受される法人文書数に大きな異同はないものと考えられるので、当館への移管冊数も次第に落ち着いてくるのではないかと予想しているが、それがどのへんの数値になるのかは今の段階では何とも言えない。

2 非現用法人文書廃棄冊数

当館では、2004年度から非現用法人文書を評価・選別の上、廃棄する業務を行っている。表2はその冊数である。年度によって冊数に変動があるが、それは一つには当館内部における諸業務への人員配置のバランスによ

るものである。なお、2008年度までは各部局からの移管分のみ廃棄を行っていたが、2009年度は事務本部移管分についても廃棄を行った。評価・選別、廃棄は当館の重要業務であるが、来年度施行予定の「公文書等の管理に関する法律」によると、「国立公文書館等」への移管は廃棄作業終了後と定められており（第8、11条）、今後京都大学における法人文書廃棄の具体的方法については検討する必要がある。

3 資料の公開点数

当館の閲覧室は2004年4月に開室し、以後整理の終了した資料を順次公開している。年度ごと、資料の区分ごとに新たに公開した資料の点数を示したのが表3である。非現用法人文書のほか、卒業生や元教職員等から寄贈された各種の資料（個人資料）、1950年に廃校となった第三高等学校の公文書を中心とした資料（三高資料）、京都大学による広報誌等の刊行物（学内刊行物）、所蔵資料検索システムにおいて公開している歴史的写真（写真）の区分がある。当館の大きな課題は資料公開業務であり、現在15万点を超える資料を所蔵しながら、公開はその5分の1にも達していない。

4 閲覧室利用者数

当館の閲覧室は、百周年時計台記念館1階の歴史展示室に隣接している。展示の入場者がその流れで閲覧室に入り、その資料を手にとるといったことは少なくない。ただ、文書館として重視したいのは、非現用法人文書、個人資料、三高資料といったいわゆる一次資料がどれくらい利用されるかということである。一次資料閲覧者を含む閲覧室の利用者数

を月ごとに示したのが表4である。一次資料閲覧者は、ここ数年70人前後となっている。資料の公開点数を増やし、公開資料の情報を積極的に広報するといった地道なやり方で、一人でも多くの方に資料を利用してもらう努力をするしかないと思われる。

5 歴史展示室入場者数

歴史展示室は、2003年12月に開室したが、入場者数の記録は2004年4月から行っている。歴史展示室は、京大のシンボルである百周年時計台記念館の1階にあり、入場も無料とあって、多くの方が入場している。歴史展示室入場者数を月ごとに示したのが表5である。年ごとに漸減傾向にあることは否めない(2009年度は、新型インフルエンザの影響で

修学旅行生が減少したことも背景にあると考えられる)。年2回の企画展開催や、他部局等に企画展示室を利用してもらうことなどによってリピーターにも一定の配慮はしているが、常設展の展示替えも含めて今後のあり方を検討する時期ではないだろうか。

以上、ごく簡単ではあるが当館の10年間をいくつかの数値で振り返ってみた。前述のように「公文書等の管理に関する法律」が来年度施行されることによって、日本のアーカイヴズを取り巻く環境も大きく変わっていくことが予想される。当館もその活動の一層の活性化が求められるであろう。

表1 非現用法人文書移管冊数

年度/移管元	事務本部	各部局	計
2001	21863	-	21863
2002	1242	19699	20941
2003	541	5799	6340
2004	1180	5791	6971
2005	2029	5955	7984
2006	1811	7437	9248
2007	2207	6702	8909
2008	2102	8917	11019
2009	2619	9647	12266

表2 非現用法人文書廃棄冊数

年度	冊数
2004	5191
2005	9116
2006	5221
2007	7933
2008	5714
2009	9266

表3 資料の公開点数

年度/区分	非現用法人文書	個人資料	三高資料	学内刊行物	写真	計
2004	3473	1523	791	-	-	5787
2005	1272	-	-	-	-	1272
2006	733	-	-	-	-	733
2007	33	106	1310	-	-	1449
2008	251	1193	2691	3437	-	7572
2009	363	1323	1589	557	1019	4851
2010	-	4615	-	-	-	4615
計	6125	8760	6381	3994	1019	26279

表4 閲覧室利用者数

年・月	利用者										
2004年4月	24(0)	2005年4月	68(7)	2006年4月	85(4)	2007年4月	26(1)	2008年4月	51(2)	2009年4月	44(2)
5月	12(0)	5月	41(4)	5月	54(1)	5月	25(2)	5月	61(5)	5月	40(6)
6月	22(4)	6月	21(3)	6月	58(5)	6月	27(2)	6月	48(9)	6月	16(3)
7月	34(2)	7月	31(2)	7月	40(4)	7月	47(3)	7月	61(12)	7月	93(10)
8月	49(3)	8月	58(7)	8月	259(8)	8月	120(4)	8月	198(6)	8月	137(5)
9月	24(0)	9月	15(5)	9月	44(4)	9月	70(15)	9月	43(5)	9月	43(4)
10月	56(2)	10月	40(1)	10月	65(9)	10月	75(10)	10月	84(6)	10月	50(5)
11月	22(3)	11月	130(4)	11月	69(9)	11月	82(14)	11月	94(4)	11月	31(2)
12月	17(2)	12月	46(3)	12月	51(10)	12月	37(4)	12月	67(7)	12月	37(5)
2005年1月	27(2)	2006年1月	66(5)	2007年1月	54(2)	2008年1月	42(8)	2009年1月	21(3)	2010年1月	24(4)
2月	17(5)	2月	66(9)	2月	54(5)	2月	59(2)	2月	58(9)	2月	58(13)
3月	41(12)	3月	177(5)	3月	64(4)	3月	63(3)	3月	62(4)	3月	68(10)
年間合計	345(35)	年間合計	759(55)	年間合計	897(65)	年間合計	673(68)	年間合計	848(72)	年間合計	641(69)

()内は一次資料閲覧者を内数で表記

表5 歴史展示室入場者数

年・月	入場者										
2004年4月	3326	2005年4月	3181	2006年4月	3357	2007年4月	3037	2008年4月	2472	2009年4月	2420
5月	3260	5月	2783	5月	3347	5月	3065	5月	2637	5月	2032
6月	2460	6月	2352	6月	2419	6月	2980	6月	2525	6月	1759
7月	2759	7月	2028	7月	2434	7月	2336	7月	2864	7月	2262
8月	4999	8月	4166	8月	6160	8月	5886	8月	5362	8月	4785
9月	2483	9月	2436	9月	2893	9月	2522	9月	2434	9月	2556
10月	3249	10月	3163	10月	3179	10月	2735	10月	3375	10月	2753
11月	4101	11月	4665	11月	4235	11月	3608	11月	3782	11月	2640
12月	1959	12月	2750	12月	2341	12月	2305	12月	2315	12月	1596
2005年1月	1511	2006年1月	2488	2007年1月	1905	2008年1月	2014	2009年1月	1377	2010年1月	1403
2月	2171	2月	3857	2月	4044	2月	2564	2月	2170	2月	2151
3月	3006	3月	4774	3月	3552	3月	3098	3月	2942	3月	3049
年間合計	35284	年間合計	38643	年間合計	39866	年間合計	36150	年間合計	34255	年間合計	29406

[日誌] (2010年4月～9月)

- 2010 / 4 / 2 西山准教授、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。
- 4 / 5 中山久氏より、京大紛争関係資料寄贈。
- 4 / 6 塚田丞氏より、大学紛争関係資料寄贈。
- 4 / 6 海外(中国)より、京都大学の歴史に関する照会。
- 4 / 12 広庭基介氏より、図書館関係資料寄贈。
- 4 / 12 学外より、アインシュタイン来学に関する照会。
- 4 / 17 西山、新入生特別セミナーで「京都大学の歴史を知ろう」と題して講演。
- 4 / 21 大学文書館教員会議。
- 4 / 30 河西秀哉助教、退任。
- 4 / 30 『京都大学大学文書館だより』第18号発行。
- 5 / 6 福家崇洋助教、着任。
- 5 / 6 事務補佐員保坂詠美雇用。
- 5 / 11 学外より、河上肇に関する照会。
- 5 / 11 学外より、舎密局に関する照会。
- 5 / 12 立教学院より、大学史展示・自校史教育調査のため来館。
- 5 / 16 学外より、所蔵写真に関する照会。
- 5 / 18 松本英和氏より、湯川秀樹関係資料寄贈。
- 5 / 19 大学文書館教員会議。
- 5 / 20 学外より、須田国太郎画「学徒出陣図」に関する照会。
- 5 / 24 西山勝夫氏より、戦後学生運動関係資料寄贈(8月31日にも追加で寄贈)。
- 5 / 26 『大学紛争関係資料』I～Vを公開開始。
- 5 / 27 京都新聞社より、北部キャンパスに関する照会。
- 6 / 1 学外より、第三高等学校校旗に関する照会。
- 6 / 2 京都新聞社より、京都大学教授の生年に関する照会。
- 6 / 5 京都橘大学より、大学文書館施設見学のため来館。
- 6 / 11 学外より、お雇い外国人L・L・ジェーンズに関する照会。
- 6 / 11 読売新聞社より、学徒出陣について照会。
- 6 / 12 西山、総合博物館企画展「科学技術Xの謎」公開講座において「村岡範為と創立期の京大」と題して講演。
- 6 / 14 吉村敏夫氏より、学徒出陣関係資料寄贈。
- 6 / 15 学外より、アインシュタイン歓迎会に関する照会。
- 6 / 16 大学文書館教員会議。
- 6 / 16 学外より、第三高等学校教授中村善太郎に関する照会。
- 6 / 17 東海大学より、所蔵資料検索システムの運用について視察のため来館。
- 6 / 17 立命館大学百年史編纂室より、大学文書館の現状・設備について視察のため来館。
- 6 / 24 朝日新聞社より、法経一番教室に関する照会。
- 6 / 25 学外より、河上肇講演に関する照会。
- 6 / 28 西山、高エネルギー加速器研究機構史料委員会に出席。
- 6 / 29 学外より、ボート部関連資料に関する照会。
- 7 / 8 大学文書館教員会議。
- 7 / 12 浦本藩一氏より、文科大学関係資料寄贈。
- 7 / 12 日本経済新聞社より、公文書管理法、大学文書館について取材。
- 7 / 13 佐竹妙子氏より、佐竹昭広関係資料寄贈。
- 7 / 15 宮地英紀氏より、『中支點描…六十三年目の遺作集』寄贈。
- 7 / 20 立命館大学百年史編纂室より、「医(歯)学部進学コース」に関する照会。
- 7 / 20 大学文書館テーマ展「第三高等学校の歴史 - 明治・大正期を中心に」開催(～9月6日、於・京都大学百年時計台記念館歴史展示室)。
- 7 / 23 韓国漢陽大学より、大学アーカイブズについてインタビューのため来館(～26日)。
- 7 / 27 法人文書の移管に関する説明会を開催。
- 8 / 5 学外より、常設展示撮影のため来館。
- 8 / 6 志田忠正氏より、志田一夫関係資料寄贈(8月24日にも追加で寄贈)。
- 8 / 6 京都市上下水道局より、京大水道に関する照会。
- 8 / 9 学内外より、福井謙一関係資料の閲覧のため来館。
- 8 / 11 オープンキャンパス2011開催(～12日)。
- 8 / 19 読売新聞社より、原子爆弾災害総合研究調査班に関する照会。
- 8 / 23 徳島市立高等学校より、歴史展示室見学のため来館。
- 8 / 24 学外より、学位論文タイトルに関する照会。
- 8 / 24 学外より、元教官の学位取得の有無について照会。
- 8 / 26 大学文書館所蔵の非現用法人文書の一部を廃棄(～9月17日)。

- 8/26 中国中央電視台より、滝川事件について取材のため来館。
- 8/30 福家、平成22年度公文書館等職員研修会に参加（～9月3日、於・国立公文書館）
- 9/2 西山、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。
- 9/8 清水助教、人間文化研究機構国文学研究資料館主催「平成22年度アーカイブズ・カレッジ」において、「アーカイブズ活動の課題」と題して講義。
- 9/9 南山大学より、歴史展示室見学のため来館。
- 9/9 舞鶴市教育委員会に木下広次関係資料貸出（企画展使用のため11月5日まで）。
- 9/10 野生動物研究センター企画展「日本

- の霊長類学のあけぼの；伊谷純一郎が遺したフィールドノート」開催（～10月3日、於・京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。
- 9/10 福家、全学教育シンポジウム「京都大学の直面する教育課題について～第2期中期目標・中期計画のスタートに当たって～」（於・京都大学宇治おうばくプラザ）に参加。
- 9/14 内田正明氏より、内田洋一等関係資料寄贈。
- 9/16 2009年度保存期間満了の事務本部および各部局の法人文書搬入（～9月28日）。
- 9/24 立川康人氏より、『たけみ会誌』寄贈。
- 9/24 大学文書館教員会議。
- 9/30 大学文書館運営協議会。

＜お詫びと訂正＞

本誌前号（第18号、2010年4月30日発行）の「日誌」2009年12月24日付記事「飛川順子氏より、島田虎次関係資料寄贈」は、「飛川順子氏より、島田慶次関係資料寄贈」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

大学文書館の動き

法人文書の廃棄と移管をおこないました

大学文書館では、2010年8月26～30日および9月3・17日に法人文書の一部を廃棄しました。対象とした2009年度移管文書9349冊（部局移管分のみ、ただし文学・法学研究科分は除く）のうち、評価選別作業で保存決定された文書や、部局からの保存希望文書を除く6105冊を廃棄しました。廃棄率は約65%で、昨年度実績より10%ほど低くなりましたが、これは一部の部局で保存希望の文書が多かったこと等が理由として挙げられます。

一方、法人文書の移管は9月16～28日におこない、今年度はリスト上数値で8467冊の文書を受け入れました。ここ数年、大学文書館への文書の移管数は増加していましたが、今年度は昨年度に比べると約4000冊の減少となりました。移管を受け大学文書館では、移管の際に添付される「移管リスト」と、実際に搬入された文書との照合作業をおこなっています。

来年度施行予定の「公文書等の管理に関する法律」（公文書管理法）では、法人文書にもより一層の適切な管理が求められています。大学文書館としても、事務本部・各部局の協力を得ながら、これまで以上にしっかりと取り組んでいきます。

人の動き（2010年4月～2010年9月）

- 2010年4月30日 河西秀哉、大学文書館助教を退任。
2010年5月1日 福家崇洋、大学文書館助教に着任。

京大創立十周年と木下広次の断案

京都大学大学文書館助教 清水 善仁

京都帝国大学の創立十周年は1907（明治40）年である。現在、創立記念日である6月18日は休日、前後の日に創立記念音楽会等のイベントがおこなわれているが、十周年を含め大学の草創期には、毎年創立記念の式典が開かれていた。だが、その開催日すなわち創立記念日は4月1日であった。春・秋二学期制の当時、6月中旬が春学期の試験期間に当たり、「教官学生共ニ心中平時ニ無之〔中略〕真ノ祝意ヲ表スルニ至ラザル」のがその理由である（大学文書館所蔵「記念祝式関係書類 自明治三十一年至大正三年」資料番号MP00319）。式典には学生・教職員はもとより、卒業生にも参加を呼びかけ、皇族や文部大臣等多数の来賓も参列した。また、学内一般開放や記念講演会もおこなわれ、十周年の折は「水力の話」という演題で理工科大学教授であった田辺朔郎が登壇した。

さて、『京都大学百年史』資料編二には、創立十周年の記念式典における木下広次総長の式辞が掲載されている（202～205頁、句読点は引用者）。内容は創立十周年を迎えた京大の現状と今後についての木下の断案である。その一部を紹介しよう。

顧フニ大学設立ノ事業ハ之ヲ創業ノ時期及潤色ノ時期ニ区画スルコトヲ得ヘシ。本学創立以来茲二十年、其ノ大体ノ施設経営ニ於テハ創業ノ事稍々竟成ヲ告ケタルモノノ如シ。然カモ文科大学ノ完成・医科大学ノ拡張ノ如キハ今日ニ於テ尚ホ創業ノ部分ニ属シ、将来ノ拮据経営ニ待ツトコロ甚タ尠カラス。蓋シ十年ノ歳月ハ長キカ如シト雖モ、事業上ヨリ之ヲ見レハ其ノ甚タ短促ナルコトヲ感セスンハアラス。殊ニ予算ノ不成立其ノ他種々ノ障害アリテ予期ノ如ク事業ヲ進捗セシムルコト能ハス、昨年ニ至リテ漸ク各分科大学ノ開設ヲ完了シタル次第ナリ。今ヨリ以後進ミテ潤色ノ時期ニ入り、既往ノ

経験ニ徴シ各分科大学ノ細目ニ涉リテ着々改善修飾ニ従事セントス。

ここに述べられているように、前年の1906年に文科大学が創設されたことで、京都帝国大学設置の勅令209号で規定された四分科大学（理工・法・医・文）がすべて整備された。したがって木下は、創立十周年の節目を「創業」から「潤色」への転換のメルクマールとして捉え、今後はさらに各分科大学の充実に尽力する決意を語っている。

本大学カ学生及卒業生ニ期待スル所ハ、其ノ能ク学芸ヲ講究シ精神ヲ修養シテ有用ノ人材タルト同時ニ、完全ナル士君子タルニ在リ。本大学ハ常ニ此ヲ以テ学生教養ノ方針ト為ス。

これは学生や卒業生に向けた言葉である。「士君子」とは「徳行のそなわった人。学問、人格ともにすぐれた立派な人。君子。」（『日本国語大辞典』第二版、第六巻）という意味で、木下がこれまで入学宣誓式等で述べてきた「自重自敬」等の思想に通底するものといえよう。

ところで、先記の資料「記念祝式関係書類」にはこの式辞の原稿が残っており、そこには何度も推敲を重ねた跡が見える。あれこれと思索を巡らせた上での演説だったのだろうか、それだけ創立十周年に刻む想いが強かったのだろうか。

しかしそのわずか3ヵ月後、木下は総長職を辞した。病気が要因という説がある一方、新聞紙上では様々な憶測が飛んだ（『京都大学百年史』総説編参照）。さらにその3年後には、木下は不帰の人となる。「創業」から「潤色」へ、学生に士君子たれ、と謳った創立十周年の木下の断案は、その後どのようにして今日まで引き継がれたのか。京大百年の歴史のなかから、その手掛かりをつかむより他はない。